様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：８３５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２９３

研究課題名（和文）近世造仏聖の造像活動に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic research about The activity that a Buddhist image is made of modernized world The priest who makes a Buddhist image

研究代表者
近藤　暁子（KONDO, AKIKO）

山梨県立博物館・山梨県立博物館・学芸員

研究者番号：８０５７４１５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世作仏聖の宗教活動の中でも作仏活動と宗教観との関連性について、木喰行道の現存作例と、活動を通じて解明することを目的とした。その手段として、行道が行った多仏制作に着目した。多仏制作は他の作仏聖にも共通することである。調査は行道の作品の中でも、生涯最大の数を誇った群像「四国堂」安置諸像を中心に進め、写真資料と基本データの収集に努めた。収集データ分析の結果、群像制作の際、同一の尊像の造形に変化を持たせるなど、単に数だけを求めたわけではない様子が確認された。以上のような成果により、今後の作仏聖の造像活動に対する研究に、新たな局面を開くことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、近世の作仏聖に対する認知度は高まり、円空や木喰といった作仏聖の手による作品の学術的な評価は高まっている。本研究では、特に“微笑仏”として一般の人気の高い木喰の作品を例に、認知度が高まった一因である造形的特色に注目し、中でも多くの仏像を一同に制作する多仏制作を調査しデータを蓄積・分析することによって、木喰自身が造形に工夫を凝らして、その特色を生み出していたことを明らかにすることができた。社会的に関心の高い“微笑仏”の魅力の要因について、その一部を具体的に提示しえたことは意義深いものと考える。

研究成果の概要（英文）：This research had for its object to elucidate in the religious activities of monk engraved Buddha statues in the early modern times, through an existence examples of Mokujiki Gyodo, and activity. I noticed that Gyodo made many Buddhist images as the way. Produce many Buddhist images is to be common to other priests who make a Buddhist image. An investigation was advanced to enshrined Buddhist images at “Shikokudo”, record-high building Gyodo constructed. Centers, pictures and basic data were collected. I found one as a result of the data analysis. Such as even the same kind of image changes the shape, that's the case that a device is done. It was possible to open the new phase in a study about activity of future's activities of monk engraved Buddha statues by an outcome like the above.

研究分野：人文学

キーワード：木喰　行仏聖

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

木喰行道（五行、明満ともいう）は江戸時代後期の木食僧で、特に作仏聖として多くの作品を残したことで知られる。行道をとりまく研究状況は、近年、その処女作と言われてきた作品が、行道の弟子である白道の作品であることがわかり、また、今まで作例が確認されなかった東北地方において作例が確認されるなど、彼の活動について新たな事実が明らかにされてきた。

以上のような新発見の事項、さらに新たに発見された資料の存在は、検証すべき新たな可能性の存在をも示唆しており、継続的な調査により、さらなる研究の進展が見込まれる状況であった。しかし作仏開始の初期段階の様相が明らかになりつつある一方、作仏を開始した契機、理由については、作仏聖として知られる行道の宗教的本質にかかわる事柄でありながら、十分な検討がなされてきたとは言い難い状態にあった。

２．研究の目的

そうした状況をうけて、本研究では、木喰僧が行ってきた造像活動に着目し、その宗教的本質を明らかにすることを目的とした。特に多くの仏像を制作することを目指した行道の「多作性」に着目して、研究を進めることとした。

３．研究の方法

（１）継続的な調査による成果を得るため、東北地方を中心に木喰行道の廻国ルートを再検証し、作例が残されている可能性のある場所を抽出し、情報収集、現地調査、写真撮影などを行い、基本データを収集する。

（２）木喰行道の現存作例について精査し、特に検証すべき像を抽出し、対象とすべき像について、情報収集、現地調査、写真撮影などを行い、基本データを収集する。

（３）（１）、（２）で得られた情報について検討し、木喰行道の多仏制作の特徴について、検討すべき対象との比較を行う。

４．研究成果

本研究の成果について、実地調査により得られた結果を中心に述べる。調査は木喰行道が行った多仏制作の中でも、生涯最大数の仏像を安置した「四国堂」諸像について行った。

（１）　子安観音菩薩像（山梨県個人）

①像の概要

本像は、台座・光背を含む総高 74㎝。台座、頭光を含む一木造で、広葉樹材製かと思われる。木心は像の左やや後方に込める。

形状は、頭部より頭巾状に布を被り、白毫相、三道相を表す。相貌は、首をやや右にかしげ、口角をわずかに上げて控えめな笑みを浮かべる。左手に子を抱き、右手に瓢箪のような持物を執る。子は頭上に髪を結い、両手に器のようなものを捧げ持つ。右腕上腕に臂釧をつける。服制は、背面の衣文が省略されているために判然としないが、上半身は天衣というより衲衣を偏袒右肩にまとうような表現で、衣の端は右方に垂下してその先端は框にまで達する。膝を覆う布が衲衣なのか腰布なのかは、現状では判然としない。

台座は荷葉・蓮台・框で構成される。

頭光は、正面では外側の円光内に、背面では中心に一字とその周縁に梵字が墨書される。体部背面には、中央に大きく尊名を表す「観音」と記され、現状ではそれ以上の判読は困難であった。

保存状態は、頭光の最外縁部の放射状の刻出部分が亡失している。本像の頭光の横最大幅は 19㎝ であり、他の四国堂仏と比較すると、平均して約 5㎝ 不足している。したがって、何らかの理由で削り取られ、現状のごとく整えられた可能性が高い、

②造形的特色等について

木喰が生涯で制作した群像の中で、最も多くの像を安置したのが、故郷である現在の山梨県身延町に建立した「四国堂」であることは、残された資料や先学の研究より明らかである。

四国堂は、四国八十八か所霊場の本尊を一堂に会した堂宇で、その建立の経緯を木喰自身が記した『四国堂心願鏡』や協力者が名を連ねた円盤状の木板「講中蓮名〆拾三人」によれば、寛政 13 年（1801）3 月から建立にとりかかり、享和 2 年（1802）2 月に開眼供養がなされたことがわかる。堂内に安置するために制作された仏像は、88 体に加え、霊場を開いた弘法大師空海の像、自身の像などがあり、90 体近くであった。

これらの像は、大正 8 年（1919）に売却され四散し、個人の手にわたったものも多かったらしく、現在では当初の半数、約 40 体ほどの現存が確認されている。

それらに共通する造形的特色を述べると総高は 70㎝ 前後で、縁を放射状に刻んだ頭光も一材から彫出し、台座は上から荷葉・蓮台・框の３部から構成され、荷葉には列弁状の彫刻が施される。この形式は、この時期、かつこの地域周辺で制作された像のみに見られるもので、装飾性と後に続く定型化への指向を兼ね備えたものであると言えよう。

こうした造形的特色を本像に照らしてみると、頭光の最外縁部が失われているほかは共通するものであることがわかる。したがって、背面の墨書などから明確にはし得ないものの、本像が

四国堂安置諸像の１体であることは疑う余地はないと言える。
③制作時期、伝来等について
　本像には、制作年を示す年紀は記されておらず明確な制作時期は不明である。残念なことに赤外線調査によっても、確認しえなかった。しかし、四国堂の造像期間は、先述の資料などによれば、寛政 13 年（1801）３月から９月末までの間である。本像の制作時期はこの頃にあたるとみて良い。四国堂に安置されていたものが、大正８年（1919）に売却されたものの一体である。

（２）　馬頭観音菩薩像（山梨県個人）
①像の概要
　本像は、台座・光背を含む総高 72.2㎝。台座、頭光を含む一木造。表面仕上げのため、樹種は判然としない。木心は像の背面後方にはずす。
　形状は、白毫相、三道相を表す。頭上には馬の頭部を配し、それを頭髪が囲むような表現をとる。頭部から胸前、さらに腹前に至る筋状の彫りは一連で、頭髪と衣の区別が判然としない。腰布、天衣も同様である。両手は胸前で合掌し、両手首には腕釧をつける。さらに両前腕部には各一条の布がわたる様子が表されるが、他の四国堂安置仏の造形と比較すると、これは本来は天衣を表しているものと推察される。
　台座は荷葉・蓮台・框で構成される。他の四国堂安置仏と異なり、本像では蓮台から框に至る背面部分を彫り抜かず、地付き部まで材を残している。
　頭光の正面には、外側の円光内、背面には中心に一字とその周縁に梵字が墨書される。体部背面には、次のような墨書が認められる。「日本千タイノ内/聖朝安穏増寶壽　正作/天一自在法門/馬頭観世音大士/八十四才/木喰/天下安楽興正法　五行菩薩/寛政十三酉□十一月十八日」
②造形的特色等について
　本像もまた、先述の四国堂仏の造形的特色と共通する特徴を有している。行道による馬頭観音像は、本像以降に制作されたものは頭髪と衣を区別して彫り分けるなど、より整理された造形表現をみせるようになる。また、蓮台から框に至る背面部分に材を彫り残す表現は、寶生寺三十三所観音（新潟県・文化元年〈1804〉制作）に見られるような、天衣や衣の一部を膝上から蓮台の背後まで垂下させるような形式につながるとも思われるが、本像においてはこれを衣の一部と考えていたようには思われない。
　以上のように他像と比較すれば、実質を欠く天衣の表現といい、この像においては行道の造形表現に試行錯誤の過渡的な様子を見ることができる。
③伝来等について
　本像は、背面墨書により制作年が寛政 13 年（1801）と明らかであり、四国堂安置仏の１体であることがわかる。
　90 体近く制作された四国堂に安置された仏像のうち、８体はその制作に特に尽力した南澤村の３軒に内仏として与えられたことが『四国堂心願鏡』により明らかだが、本像はその内の１体と伝えられ、現在も個人の所有である。

（３）　総括
　（１）、（２）の調査結果により、次の２点が明らかとなった。
①　四国堂安置仏の中には、観音菩薩が数体含まれる。（１）の像は背銘には「観音」と記されており子安観音像である本像も観音として造立された様子がうかがわれる。そのため、同一の尊像の制作にあたっては、意図的に図像にバリエーションを持たせようとした可能性が高い。そうした傾向は「薬師如来像」「千手観音像」においても同様で、多仏制作を行う際、行道が造形的な工夫を意図的に施していた可能性が高いことを明らかにすることができた。
②　四国堂安置仏は共通した特徴を持ち、いずれも群像としての統一感がとれた造形的特色を持つ。一方で、（２）の像のように、後に続く本格的な多仏制作に継承される過渡的な様相も有することがわかった。四国堂安置仏が、多仏作例の展開を考える上で重要な作例であることが明らかとなった。
　以上のように、作仏聖が多仏制作を行うにあたり、単に多くの仏像を制作することのみに主眼を置くのではなく、造形的な工夫を意図的に凝らしてなされていることがわかった。さらにそれが彼らの宗教観とどのような関連性を持つのか、データの蓄積を進めていくことにより、今後の木喰研究の新たな局面を開くことにつなげていくことができるものと考えている。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計１件）
①　近藤暁子 他、身延町、「四国堂の仏-故郷に残された生涯最大の群像-」『身延町なかとみ現代工芸美術館　開館二十周年事業　生誕三百年　木喰展　～故郷に還る、微笑み。～』図録、2018、100―105

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
山梨県立博物館ホームページ http://www.museum.pref.yamanashi.jp/

６．研究組織

(1) 研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。